

2016年度 東日本大震災復興応援 ボランティアツアー 報告書



ツアー行程

- 8月26日 さくらプロジェクトでボランティア活動 (P. 2)
- 8月27日 広野わいわいプロジェクトでボランティア (P. 2)
富岡町視察 (P. 3)
- 8月28日 民泊&郷土料理作りで交流 (P. 4)
南相馬市小高駅でボランティア (P. 4)
- 8月29日 仙台市荒浜地区・東松島市視察 (P. 5)

2016年度震災復興応援 ボランティアツアー!!

8/26 広野町

(福島)



8/27 富岡町

(福島)



8/28 南相馬市

(福島)



8/29 荒浜地区
松島・東松島市
(宮城)



東日本大震災後、ボランティアセンターでは、福島県 宮城県で、ボランティア活動を行ってきました。震災後約5年が経過しても、福島県では未だ3.11のまま変わらない場所もあります。そこで昨年度より福島県でボランティア活動を行い、今年は新たに宮城県の視察もとり入れたツアーを企画しました。福島県、宮城県の現状を知り、自分達にできることを考え、今後継続的な支援を企画、実行していきたいと思います。

広野・楡葉で 体験したこと

桜プロジェクト



町の様子を見せて頂きました



暑い中頑張りました



木茎にからまったつたをひいてみる



Before

キレイになりました



After

昨年のツアー参加者で
寄贈した桜



広野
町長が
来ました!

福島県浜街道・桜プロジェクト
東日本大震災の被害を受けた沿岸部を
2万本の桜並木で彩ることを目指す
プロジェクトです。
4年後の東洋レインボックで浜街道を
聖火ランナーが走ることを願います。



糸のつけ方を教わっています

広野わいわいプロジェクト

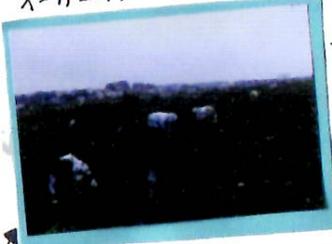


わいわいプロジェクトの
根本社 磯部さんが
初エンターテインメントを行いました。



草刈りの始まり!

オーガニックコットン火田



雨の中
頑張りました。



ボランティア活動の後の食事!



皆さんあたたかく迎えてくださいました

私はコットンパイアです
福島の復興プロジェクトで栽培されている、
オーガニックコットンを使用して、一つ一つ手作り
作られています。コットンの中に種が含まれていて、
栽培→収穫→パイア作り→購入→各地で栽培→各地で収穫

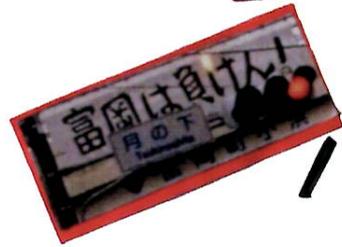
福島にコットンを送り返してみよう

このサイクルを繰り返して、畑を盛り上げています
みなさんも一緒にコットン栽培に取り組ま
せんか?



たね

3.11 から 5 年後の福島



バリケードで分断された町

バリケードで分断された町



かつては
桜の名所だった
夜ノ森地区。
今では
放射線の影響で
ゴースタウンに…。

同じ区域内での警戒レベルの違い



震災発生時に住民の避難誘導
を行い殉職された方が2名いる。
彼らの乗っていたパトカーは年々劣化
しており私たちが訪れた時には去年より
サビが増えていた。いずれは屋内に
保存される予定である。

津波巻き込まれた警察車両



昨年



↓ 富岡駅前

今年



昨年は震災当時の
建物や看板が、
そのまま残って
いたが、
今年訪れてみると
更地になっていた。

平山さんの話を聞く学生達



平山 勉さん(相双ボランティア)
バスで町の中を見ながら当時からの様子についてお話ししていただきました。
平山さんは2011年に歩道橋に「富岡は負けん」という横断幕を掲げました。NTT東日本のインターネットライブカメラで24時間映はされてきたからだそうです。今もそれを勇気づけるために今も掲げられています。実際に防護服を脱ぎ下しました。

仙台市なのに... 住めなくなった 荒浜地区

目の前に広がる津波の爪痕

碑の高さが第一波の津波の高さと同じ高さ建てられています。



その高さは平野部では世界最大級といわれています。

津波によってカレキが絡まったり、



曲がったり、侵した部分以外にしか枝などが残っていました。



震災前



震災後

津波避難所だった荒浜小学校

小学校の3階にまで津波は達し、避難していた



方々も沢山亡くなってしまいました。安全とされていた避難所は、絶対に安心できる場所ではありませんでした。

人気のない住宅地と海岸

2011年3月11日以前は住宅地が多くあり、活気のあった海岸も今では家の基礎部分のみが残り、その周りには草が生え、まるで草原のようになっていました。



被害にあった菅野さんのお話

仙台市内でも被害の大きかった地域に住んでいた菅野さん。お話によると、津波によって、家の1階部分は壊され、無事だったのは2階のみだったそうです。また、震災の前日に会っていた友人が亡くなってしまったという知らせも2週間が過ぎた頃に聞き、それまでの疲労も重なり、当時は感情を一時的に失ったような状態になっていたとおっしゃっていました。



聖学院大学 2年生
菅野 雄大 さん

中学2年生の時に被災。現在でも埼玉から仙台へ農業をやるヒモへのボランティアを続けている

あばいん東松島!!



震災前の人口 → 43142人
 死者(東松島市民) → 1110人
 行方不明者 → 24人

この写真は、震災当時の宮戸地区です。野蒜地区にあるファミリーマートに展示してありました。



左の写真は、旧東名駅が津波によって流されてしまったために、丘陵地を整備し、新たに高台に移転されたものです。野蒜駅と新東名駅の周辺の新たな街並みの形成が目指されています。

被災状況と復興状況

市内の野蒜地区には、海沿いに大きな運河があります。3月11日の東日本大震災において、津波が来たときに、運河と海の間にある建物が運河の中に沈みました。特にお寺の観音様がひどくお墓のお骨が流されてバラバラになってしまった、と被災の方が話してくれました。

市内の野蒜駅や東名駅、流れてしまった住宅に住んでいた方は高台に移住しはじめました。家の形を継ぎたい方は家を建て直しています。そうではない方は避難所から公営住宅に引っ越しを希望されています。しかし公営住宅に慣れない高齢者の方は孤独を感じながら生活しています。中には避難所生活の方が避難所がないがでてて孤独を感じたため、戻りたいという声もあるそうです。

あばいんとは...

「一緒に行こう。」
 という宮城県の方言です。

普段からできる防災対策

自分がもし被災した時に持っている便利なものは、AX、ラジオ、ホイッスル、ライトだそうです。

また、普段から家族と災害時の避難先について話し合いをしておくことで災害時に困りません。

大田区での被災地に対する取り組み

東日本大震災の甚大な被害を受け、大田区では「被災地支援本部」を設置しました。現在も継続的に区民と区の協働でボランティア活動を行っています。大田区はこのボランティア活動に対して、多くの資金援助を行っており、区民は少ない負担でボランティア活動に参加することができます。これらのボランティア活動の目的は、今後自分達が住んでいる地域が被災した場合、バニッシュにせず、積極的に動ける人材を育成することだそうです。

私はボランティアに参加するのは初めてで、参加した理由も、被災地の現状について知ることができたらいいなぐらいの軽い気持ちでした。しかし、実際に自分の目で、荒れ果てて人のいなくなった被災地の姿を見たり、実際に被害に遭われた人達のお話を聞くことで、地震の恐ろしさや東北で起こったことの重大さに改めて気づきました。どこか他人事のように考えていた自分が恥ずかしくなったし、私たちが今こうやって何事もなく幸せに暮らしていることは当たり前ではなく、奇跡のようなものなのだと感じました。

印象に残ったのは被災地の方たちの姿です。どの人も未来に向かって前向きに進んでいました。未来をより良いものにするためにどうしたらいいのか考えて行動する姿に深い感銘を受けました。私も東北で起こった出来事を過去のものとして据えるのではなく、この経験を少しでも未来に生かしていかなければならないと感じました。そのためにはこのボランティアで感じたことを忘れずに周りの人に伝えていかなければならないと思います。

心理学部 3年

昨年も参加し、福島ではどのような変化があり、変化していないのかを知りたかったので参加しました。変化がよく表れていたのは富岡町だと思います。昨年の富岡町とは思えないほど更地になっていました。これで一歩前に進んだのかと思う反面、以前の富岡町はもうなくなったことにしたのかとも思いました。昨年行ったとき、富岡町は印象的でその後も一度訪れました。言い方が悪いかもしれませんが、あの富岡町があったからこそ震災を忘れてはいけない、ちゃんと向き合わなければならないと思わせてくれた場所でした。一歩一歩新しい町に生まれ変わることも大切ですが、3.11を記憶にとどめておくことも必要だと思います。

福島と宮城では復興の差が大きく表れていました。同時に福島の中でも差が表れていると思いました。しかし、どの場所でもふるさとを愛する気持ちを人一倍持ち、早い復興を望んでいます。そのことは素晴らしいと思います。東北の人には負けにくい強い気持ちを持ちたいと思います。また、普通であることの幸せを誰よりも感じ、感謝して生きていくことが東北の人が言っていた願いを叶えることにつながるのではないかと、今回改めて思いました。

文学部 2年

被災地の今を自分の目と耳で生の情報を得ることができたので、参加して良かったです。メディアが伝える情報は断片的で編集者の意図や事情によって加工されるので、「真の声」ではないのです。まさしく百聞は一見に如かずの通りだと思いました。

小高区の方々の「普通が一番大事」「風化させたくない、忘れ去られることが一番こわい」という言葉を忘れてはならないと思います。また小高や被災地の現状を一人でも多くの人達に伝えなければなりません。そうしないと被災地の出来事は過去のものとなってしまい、未来に役立てなくなってしまいます。私はこのツアーで学んだことを絶対に親や友人に話します。特に「ホイッスル、アメ、ラジオは常備して」というメッセージは必ず伝えます。そして自分も必ず実践して被災地が命がけで学んだ教訓を生かしたいです。

法学部 3年

2016年度

東日本大震災復興応援ボランティアツアー報告書

発行日 2016年11月1日

発行 立正大学ボランティア活動推進センター

印刷 有限会社 ビーンネット